

(様式-2)

西戸部の笠

-基壇のまちの拠点となる少量多品種的空間-

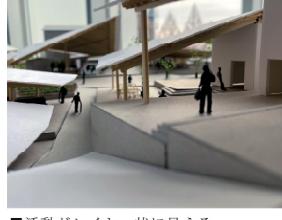
東海大学 工学部 建築学科
前川 凌



■西戸部の丘に笠のように屋根がかかり、人々の活動が少量多品種的に広がる



■頂から傾斜に沿って屋根が軽やかにかかる



■活動がレイヤー状に見える



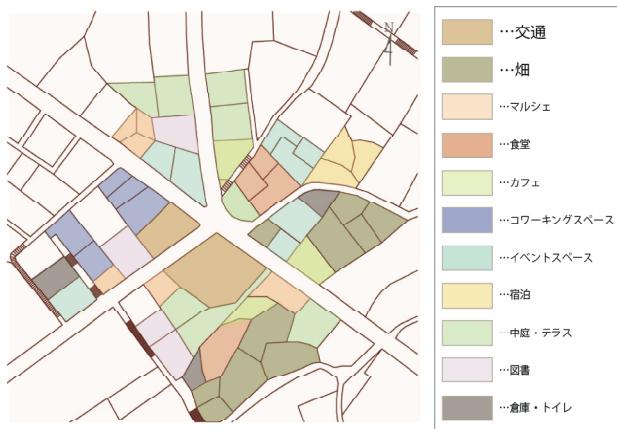
■屋根の傾きにより視線を誘導する



■畑で採れた野菜を食べられる



■基壇が内部に介入する



■少量多品種に入る機能は、交通、烟を中心にはパッチワーク状に広がる

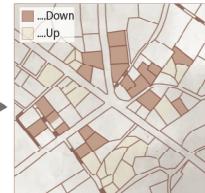
基壇の設計



スケールアウトした基壇を既存の基壇を参考に設計する

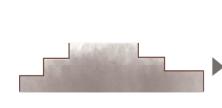


各街区ごとの基壇のキャラクターを継承しつつ細分化していく



細分化した基壇を、活動が連続するようにレベル差を変化させる

屋根の設計



基壇を細分化する



基壇の形を持ち上げる



様々な操作で形状を変える

設計主旨 concept

都市の縁辺に存在する西戸部は密集住宅街として今まで残ってきた。そのためアクセスの悪さや拠点性のなさが課題となっている。一方で、基壇や坂などの地形的魅力も存在する。このような地域の諸問題を解決し、なおかつ地域の持つ価値が増幅するような小さな拠点が必要だと考える。

計画地には、流動性を高めるための交通、拠点性を高めるための烟、それらに付随した様々な機能を少量多品種的に取り入れる。

基壇を細分化し、屋根をかけることで今まで分断されていた視線やアクティビティが緩やかにつながり計画地はより活気に溢れる。室内では基壇のレベル差を感じることが出来るため、外部の環境が介入する。まちの個性をポジティブに捉え設計することで、基壇のまちの新しい在り方が生まれる。

